

「脱構築」の牢獄と“The Windhover”の飛翔

平 林 美都子

The Prison of “Deconstruction” and the Flight of “The Windhover”

Mitoko Hirabayashi

I

Paul Valéry が「抒情詩は純粹なメロディーになろうとする」と語ったのに対し、Geoffrey Hartman はそうした「詩の願望」の中に、音と意味、形式的価値と指示的価値との間の「長びくためらい」‘prolonged hesitation’を見出した¹⁾。ハートマンの述べていることは他の文学ジャンルにも相通じるであろう。例えば Stephen Heath が James Joyce の *Finnegans Wake* を「言語のドラマ、言語の生産行為を続けるために、一刻一刻、『意味するもの』(the signifier) が『意味されるもの』(the signified) を永遠に揺さぶりながら、言語を覚醒させておく『書き』の様式」と定義しているところにも、同様の意味がうかがえる²⁾。Michael Sprinker は、あらゆる言語様式に通じる「意味するもの」と「意味されるもの」の「長びくためらい」は、最終的に言語のすべての指示的価値を消滅させる方向に向うと論じている³⁾。これは「言語の牢獄」(‘prison-house of language’) を探求しようとする彼の企て⁴⁾の端的な要約となっている。

スプリンカーが *A Counterpoint of Dissonance* で実践している「強い読み」(‘strong reading’) とは Harold Bloom が *Poetry and Repression* の中で説明しているものである。ブルームは、詩とは「たえまない変化の中の防衛のプロセス」(‘defensive process in constant change’) であり、詩そのものが「読みの行為」(‘act of reading’) だという⁵⁾。詩は、ひとつの言語による制約がひとつの表象を無効にし、代わって、新しい表象によって復元されていくものである。どの「強い詩」(‘strong poem’) も、その解釈は前の解釈に呼応し、さらに後の解釈にも従わねばならない、というブルームの説⁶⁾は、詩の「修正主義」, 「抑圧」の説明になっているといえるだろう。スプリンカーはブルームから次の言葉を引用している。「先人の影響をまず受け、創造の自由を抑圧することによってのみ、人は詩人に生れ変わることができる。詩、修正主義、抑圧は、あらゆる新しい『強い詩』によって破壊され、そしてその『強い詩』によって新たに修復されて、物悲しくも同じものになる。」⁷⁾

このスプリンカーは、G. M. Hopkins の“The Windhover”と彼自身の読みとの関係をブルーム流にとらえて、「強い読み」の実践をした。スプリンカーの『不協和音の対位法』は、強い読みにかなう詩人としてホプキンスを取り上げ、新しい読みを読者に展開してくれる。しかし、彼がイントロダクションで“The Windhover”は強い読みをすることによってのみ、英語で書かれた他の偉大な抒情詩の中で、自由な地位に到達できる⁸⁾と語っている時、実はすでに、彼の読みの問題点が露呈しているのである。以下の小論では、スプリンカーによる“The Windhover”の読みを紹介したのち、彼の読みに見られる問題点が何であるのか、考えていきたい。

II

スプリンカーは、従来の解釈を根底から覆すメタ・ポエティカルな読み方を示してくれる。しかしその斬新性の一方で、十九世紀の荒廃とカトリシズムの伝統の崩壊が“The Windhover”のきっかけとなっているのだというところは、T. S. Eliot の *The Wasteland* 調の読みを思わせ、早くもスプリンカーの読みの限界を感じさせる。

The Windhover:
To Christ our Lord

I CAUGHT this morning morning's minion, king-
dom of daylight's dauphin, dapple-dawn-drawn Falcon, in his riding
Of the rolling level underneath him steady air, and striding
High there, how he rung upon the rein of a wimpling wing
In his ecstasy! then off, off forth on swing,
As a skate's heel sweeps smooth on a bow-bend: the hurl and gliding
Rebuffed the big wind. My heart in hiding
Stirred for a bird,—the achieve of, the mastery of the thing!

Brute beauty and valour and act, oh, air, pride, plume, here
Buckle! AND the fire that breaks from thee then, a billion
Times told lovelier, more dangerous. O my chevalier!

No wonder of it: shéer plód makes plough down sillion
Shine, and blue-bleak embers, ah my dear,
Fall, gall themselves, and gash gold-vermilion.⁹⁾

空かける鷹

我らが主キリストに

このあした、まのあたりに朝のいとし子を私は見た

日の国の^{みこ}王子 斑なす暁の光に引きよせられたはやぶさの空かける姿を

風に御し 風にのり 空高く舞い上り輪をえがき 翼を波うたせ

ひたすらに飛び行くさまを！

スケートのかかとかが弓なりになめらかに弧をえがくように

遠くへ 遠くへと疾走し はばたきつつ舞い上り

舞い滑るさまを ひそやかにかくれ住む私の心は

一羽の鳥を見て動揺する——その鳥がかくも見事に 自由に飛ぶさまを見て！

この鳥の美しさと勇気と行為 おお その態度と身だしなみで

この私の心を引き締めたまわんことを！ そうすればお前から燃え出る炎は
幾層倍も美しく しかも おおわが騎士よ！ 危険をはらんだものとなるだろう

それは何も不思議なことではないのだ 一介の農夫でも畝づくりに精出せば

その鋤は光るのだ また青白い燃え残りの^{おき}燠も ああなつかしき君よ

崩れ裂け 金色の^{くれない}紅の切り傷を見せるのだ

冒頭の‘I’は、「詩中の私」(lyrical I)であり、詩を書いている「経験的私」とは全く別人である。スプリンカーはまず、この「私」が誰なのかを問う。‘I’に続く‘caught’には‘see’では包含されえない‘captive’の意味を持つ。ここでスプリンカーはハートマンの解釈を例に出し、「物を見る人、物と行為者がホプキンズの視界の中で互いに結合する」¹⁰⁾と説明している。では何が「捕えられた」のか。字義通りに考えれば、実際の鳥ではなくその鳥の飛翔が「捕えられた」のである。ハートマンのいうように、ホプキンズが鳥の飛翔の異様な形態にとりこになった時、鳥の飛翔そのものが視覚に捕えられたのだ。

従来、詩の前半は鳥の飛翔についての詩だという解釈がされてきた。ところがスプリンカーは、そのような知覚体験の詩としての読み方を否定する。もし詩中の鳥を現実の自然界に見つけるとすれば、それはkestrel(=windhover, まぐそ鷹)というよりむしろ、ロマン派詩人らがうたったような、例えばKeatsのnightingale, Shelleyのskylark, Tennysonのeagle, Hardyのdarkling thrush, Yeatsのfalcon, 又はW. Stevensのblackbirdといった鳥であってもよいわけだというのである。スプリンカーはホプキンズの鳥の描写にロマン派的伝統を認めているのだ。従って「まぐそ鷹」はロマン派の「修辞」(‘trope’)であり、この詩は「ロマン派の比喩の比喩的呼応」だとする。ホプキンズが‘To a Skylark’とか‘Ode to a Nightingale’としないで、あえて‘To Christ our Lord’と題したのは、彼特有の宗教観からだと考えたのである。

さらにスプリンカーは、キリストの受肉と罪のあがないを詩の主題だと考える説にも反論する。なかでも、「まぐそ鷹はキリストのシンボル、又はその類」だと論じた W. H. Gardner¹¹⁾ に対して、字義通りのものと比喩的なものと混同していると批判する。確かに鳥の飛翔について描かれているが、実際に読者が「見る」のは、鳥の飛翔について書いた詩人の「言語」なのだ。その時すでに、鳥の飛翔は比喩となっている。詩を字義通りに読むということは、「私は詩である」ということを読みとる以外にない、とまで彼は言い切る。

ホプキンスにとり詩を書くことは、「自己化」(‘selving’)の行為だった。これに関してスプリンカーは、「自己化」の詩として有名な、“As kingfishers catch fire…”の詩を「空かける鷹」の解説文として挙げている。彼によれば、どちらの詩も「自己化行為」(‘activity of selving’)である。「かわせみが火と燃えて…」は詩の存在と同時に「キリストのまねび」をも語っている。しかし詩自身である「私」と「キリスト」は全く同一ではないとして、スプリンカーの読みの中心となる「転喩」を持ち出してくる。

As kingfishers catch fire, dragonflies draw flame;
 As tumbled over rim in roundy wells
 Stones ring; like each tucked string tells, each hung bell's
 Bow swung finds tongue to fling out broad its name;
 Each mortal thing does one thing and the same:
 Deals out that being indoors each one dwells;
 Selves—goes itself; *myself* it speaks and spells,
 Crying *What I dó is me: for that I came.*

Í say móre: the just man justices;
 Keeps gráce: thát keeps all his goings graces;
 Acts in God's eye what in God's eye he is—
 Christ. For Christ plays in ten thousand places,
 Lovely in limbs, and lovely in eyes not his
 To the Father through the features on men's faces.

かわせみが火と燃えて とんぼが焰を呼ぶように
 円い井戸の縁から投げ込まれた石がからんからんと響きをたてるように
 かき鳴らされるたびに一本一本の弦が何かを語りかけるように
 つるされた鐘が その縁が揺れ動くたびにその名を何としてもひろめようとその音を響かせるように

この世のものはみなそれぞれ 同じ一つのことを行う

それぞれ内に住む姿をあらわし

自己を申し立て——己が道を歩み 自我を語り 自我を綴り

「私のなすことが私であり 私はそのために生れてきたのだ」と叫ぶのだ

私はさらに言う 正しい人は正義を行い

聖寵を身につけ それでそのすべての行いを聖寵で満たし

神の目にうつる自分を——すなわちキリストを神の目の前で演ずるのだ

何故ならば キリストはどのような場所にも現われ

自分のものではない美しい手足で 美しい^{まなこ}眼で

人の顔かたちを借りて 父の御業を行うのだから

‘the just man justices’で表現された詩の行為は、言語の修辞に自己を表現することであり、いいかえれば、存在からテキストへと自己を変容させることである。その意味で、詩の行為とはキリストの受肉の転喩になるのだというのである。スプリンカーの転喩の概念は、詩の修辞で表現されたものを言語レベルへ置き換えるための足場となっている。キリストが十字架上で死と復活によってその存在を主張したように、この詩も又、修辞的言語によって詩自身の存在を主張しているのである。彼によれば、どの詩も修辞を用いずには、自らを表現できないのだ。

では、修辞を用いて詩が自らを提示し、「私は詩である」と主張しているのだとすれば、「空かける鷹」は、誰が誰に語っているのであろうか。スプリンカーはこれに答えるため、「書くこと」のアレゴリーとしてこの詩を考えていく。彼がアレゴリーという言葉を使う時、隠喩であるメタファーと明らかに異なる、転喩としてのアレゴリーをさしている。そして「意味するもの」と「意味されるもの」との間の異成分が、アレゴリーを生み出すのだと定義する。アレゴリーという構造を持った詩として「空かける鷹」を読めば、鳥の飛翔もキリストも、固定した意味体系の中で解釈することはできなくなる。それらは単に転喩にすぎないのである。スプリンカーはアレゴリーの概念を使うことにより、詩は不変の意味を持ちえないという。つまりアレゴリーの概念は、テキストを唯一の読みによって説明することを不可能にする。

このように、まぐそ鷹そのものがアレゴリーなのだから、「私が捕えた」ものは、アレゴリーとしての鳥の飛翔、すなわち、言語の比喩的たわむれということになる。さらに詩全体は、詩を書くことのアレゴリーとなる。従って前半八行の鳥の飛翔の描写は、詩を書く時の言語との格闘の描写であり、‘the achieve of, the mastery of the thing!’とは詩人が詩を創造したいという叫びに他ならない。

スプリンカーのアレゴリーとしての読みは、前半、言語の修辞を達成した後、後半六行で詩を創造する力と方法について再考するため、詩人自身を顧みることになる。従来の批評家たちが頭を悩ました‘Buckle’の説明に、彼は再びガードナーの議論を持ち出す。‘Buckle’の三重の

意味（1：事に当る，交戦する—悪魔に立ち向う騎士としてのキリストのイメージ。2：締める，縛る—法則通りの鳥の飛翔。3：こわれる—この世の美の拒絶）が，キリストのまねびと調和している，というガードナーの解釈¹²⁾を彼は高く評価する。しかしその一方で，キリストのまねびは詩の創造以外に達成できないことを，ガードナーが認識していないと指摘する。スプリンカー流の，セステットの読みは以下の通りである。——詩人が詩を創るために言語やその構造と格闘したことは，まぐそ鷹の飛翔およびキリストのはりつけと復活によって表現されている。鳥の飛翔は極限に至った時，キリストのように逆説的勝利を得る。詩人も同様である。創造における極限的行為によって，彼の詩は美しくかつ危険をはらむものとなる。いいかえれば，伝統的な言語と宗教的イメージという「畝づくりに精出」し，ロマン派の詩とカトリシズムの伝統という「青白い燃え残りの燵」をあこがれる心が，彼の鋤を光らせ，伝統という消えゆく燵の「金色の紅の切り傷」を見せることになるのである，十九世紀の詩とカトリックの墮落した世界がこの詩を書くきっかけとなった。伝統が完全に崩壊して懐疑主義，虚無主義に陥る寸前に，その輝かしい力を出しきったのである——。

III

スプリンカーは別の箇所で「私のホプキンズの読みは，言語中心主義の伝統的な批評の修正」だと自分の読みの弁護をしている。さらに彼は，ホプキンズが日誌に書き記し詩において実践している言語理論を，従来の批評家たちがなござりにしてきたという事実を指摘する¹³⁾。確かにホプキンズは，彼の詩論を自らの詩の中で実践した数少ない詩人である¹⁴⁾。従って彼の言語理論，特に語源的な関心が詩の中に反映されているのは，当然であろう。しかし彼の言語への関心は，J. H. Miller のいうとおり「世界の事物を把握する手段としての言葉のインスケイブ (inscape)」だったのではないか¹⁵⁾。ここでホプキンズの詩論に立ち戻ってみたい。

ホプキンズは日誌の中の“Poetry and Verse”で次のように述べている。

「詩は心の瞑想のために形を与えられたスピーチである… 内容や意味は詩にとって必要なものだが，それは詩に形を与える要素としてのみ必要なのだ。詩とは，スピーチのインスケイブを提供するためにのみ使われるである」¹⁶⁾

ホプキンズの造語であるインスケイブは，友人 Bridges の手紙の中で触れられている。そこでは音楽や絵画と詩との類似点を述べた後，「私がインスケイブと呼んでいるものは，詩の中で私が第一にめざしているものです」と書いている¹⁷⁾。彼は，音楽のメロディ，絵画の構図と並ぶものとして，詩のインスケイブに関心を払った。このインスケイブは，彼が傾倒していた Duns Scotus の「個別性」(‘haecceitas’) と類似したものである。スプリンカーは，ホプキンズのインスケイブへの関心を，言語のパターンにだけ限ってとらえ，その「個別性」という側面

には注意を払わなかったようである。

スプリンカーが「空かける鷹」の解説文として取り上げた「かわせみが火と燃えて」は、結局、「空かける鷹」と同じものになってしまう。もし詩を書くことが「自己化」の行為だけであり、そこに同一のパターンを見出すのならば、すべての詩は単一の読みに陥ってしまうのではないか。ホプキンスが音楽と関連づけて詩には繰り返しが必要だといった¹⁹⁾としても、どの詩にも同じ繰り返しを使うということではない。それではインスケイプになりえない。スプリンカーの読みの問題点とは、読みが均一化していくという危険性なのである。

The Wreck of the Deutschland も書くことをテーマにした詩だとスプリンカーは語る。そのテーマがもっともよく表われているところとして、スタンザ22を挙げている。

Five! the finding and sake
 And cipher of suffering Christ.
 Mark, the mark is of man's make
 And the word of it Sacrificed.
 But he scores it in scarlet himself on his own bespoken,
 Before-time-taken, dearest prizèd and priced—
 Stigma, signal, cinquefoil token
 For lettering of the lamb's fleece, ruddying of the rose-flake.

五人の女——それは受難のキリストの
 象徴であり 証であり 印である
 見よ その傷は人間がつけたもの
 そしてそれは大いなる犠牲を意味するものだ
 しかしあの方は進んでそれを自分の身に緋文字で刻まれる
 あらかじめ定められ 時ならぬ死に見舞われ高く評価され 値をつけられて—
 聖痕 痕跡 五葉のしるし
 これは小羊の毛に文字を入れること 薔薇の花弁を赤く染めることだ

スプリンカーによれば、詩人にとって、信仰に無関係な記号論もありえないし、記号体系とかかわりのない信仰もありえないのである。キリストが神と人との二面を持っているように、言語にも writing と speech の二面がある。又キリストが受難と死の後、復活したように、詩人も創作過程で言語と格闘後、「詩」という形で復活するのだ。あるいは又、キリストはマリアから生れた「ロゴス＝言葉」そのものであるように、詩人も言葉を生み出す。キリストの二面性、受肉、復活、言葉という概念は、言語との間に類似した図式を作り、単一の解釈を生み出していく。

スプリンカーの読み方は「空かける鷹」においても同様である。彼は鳥をうたった他のロマン派詩人を引き合いに出し、そのどの鳥であってもよいと述べている。果してそうなのだろうか。いや、ひばりやナイチンゲールではなく、まぐそ鷹を選んだのは、それだけの理由があったはずだ。ホブキンズはまぐそ鷹の飛ぶ様子、そのインスケイブをとらえたのである。彼が実際に鳥を見たかどうかは、問題ではない。その時彼が‘caught’の言葉を使ったのは、まぐそ鷹のインスケイブを支える内在的エネルギー（instress）を感じとったためである。詩の題を‘To Christ our Lord’としたのは、まぐそ鷹や自然界の事物を眺める時のホブキンズの基本的姿勢だったからである。彼はロマン派詩人と異なり、「科学的公平さ」¹⁹⁾で自然を描写した。しかしそこには常に、キリスト者としての姿勢があった。彼が神父として行なった説教「太陽と星は輝きながら神の栄光を讃えます…ライオンは神の強さ、海は神の偉大さ、ハチミツは神の甘さに似ていて、それらが神の存在を知らせ、神について語り神に栄光を捧げます」²⁰⁾や“God’s Grandeur”はホブキンズのこうした姿勢を示している。

スプリンカーは、ホブキンズの言語の語源的関心だけを取り上げ、自然物への関心を無視してしまった。これら両者への関心が詩の中で結びつけられたことは、やはり注目すべきことであろう。スプリンカーが「かわせみが火と燃えて」の中の「自己化」行為を詩の創造という行為だけに限定したのも、やはり片手落ちだった。かわせみもとんぼも、石も鐘もそれぞれ「自己化」の行為をしているのである。もちろんまぐそ鷹の飛翔も「私のなすことは私」（‘what I do is me’）なのである。

スプリンカーの強い読みは、非常に精密な読みを示してくれたが、そこには限界があった。その読みが他の詩へと応用できない点である。彼が「自由な地位に到達できる」といった「空かける鷹」が、もし彼の読みによって自由になりえるとすれば、その結果、他のホブキンズの詩はその自由のために、逆に、がんじがらめになってしまうという危険性をはらんでいるのではないだろうか。

注

- 1) Geoffrey Hartman, *The Fate of Reading and Other Essays* (Chicago: U of Chicago P, 1975) 244–246.
- 2) Jonathan Culler, *Structuralist Poetics* (New York: Cornell UP, 1975) 106. [Stephen Heath, ‘Ambivalences’, *Tel Quel* 51 (1972) 71 からの引用。]
- 3) Michael Sprinker, *A Counterpoint of Dissonance* (Baltimore and London: The Johns Hopkins UP, 1980) 43, n. 47.
- 4) Sprinker 65.
- 5) Harold Bloom, *Poetry and Repression* (New Haven and London: Yale UP, 1976) 26.
- 6) Bloom 27.
- 7) Sprinker 3.
- 8) Sprinker 3.
- 9) G. M. Hopkins の作品の引用は W. H. Gardner and N. H. Mackenzie eds., *The Poems of G. M. Hopkins* 4th ed. (London: OUP, 1967) による。
詩の日本語訳は安田章一郎、緒方登摩訳「ホブキンズ詩集」（東京、春秋社、1982）による。
- 10) Hartman, *The Unmediated Vision* (New Haven: YUP, 1954) 55.

- 11) Gardner and Mackenzie 267.
- 12) Gardner and Mackenzie 267–268.
- 13) Sprinker 64.
- 14) Sprinker は T. S. Eliot や Yeats が、詩の中で彼らの詩論を実践しえなかったことと比較している。
- 15) J. Hillis Miller, ‘The Univocal Chiming’ in *The Disappearance of God: Five Nineteenth-Century Writers* (Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1963) 89–116.
- 16) Humphry House and Graham Storey eds., *The Journals and Papers of G. M. Hopkins* (London: OUP, 1959) 289.
- 17) Claude C. Abbott ed., *The Letters of G. M. Hopkins to Robert Bridges* (London: OUP, 1955).
- 18) *The Journals and Papers* 289.
- 19) Miller.
- 20) Christopher Devlin ed., *The Sermons and Devotional Writings of G. M. Hopkins* (London: OUP, 1959) 239.